俳風
新多留
四十三編

~9
1147
42

42
へ 0
1147
42

草等をいとなめる川辺の磐石を
おせハ不存よつて法号迄の林を山ゟ切
なしこゝてハつき地ゟ地ゟり
かの五七ヶの石ゟ表坊を
まくまよんでの谷ゟ
すゞりのすゝ
一字の冊子こなれるまゝ

柳多留百十三の朝をうぐひすもあるこゝろを

初山吹　　素堂

屋裏哀げ

素閑人

雨夕評

虎の尾ハ苑より外へ端ぬ市代　マイケ

飄々と柳風呂鏡へ寄る度吹　孫川

毛氈より墨をこぼして御ん出ある　柳百

南枝北枝始メて記ス市為生　孫川

一下枝ハ庵よそうの家掬　集雪

新田開発稲村が先の所ゝ　雪史

手代田うゝ一下伸ス春　万仁

江戸近地も江庵より　狩雪

宗祇ゆかりの京の寺　　如雲
本像も後像も無子名うらし　　嘉言
新文の中小墨絵の老梅　　芋洗
此うら梅やてをなくおもかげ　　孫川
なつかしう寺てみる笑い顔おもう　　嘉雪
きん旅労さで横ね名がうらし　　沸々
梅よりも先ず植ゑ兄の手　　マイタ
春りをまちかねおもう老梅　　千鶏

柳平三ノ一

名月よりめ十夜小雪降り　　嘉雪
新出ず動座りめ巻て留め　　孤雪
三國一の化物ハ緋乃袴　　孫川
女形てたくましき手や　　中之
日本へ雪くい親の別ゝ言　　沸々
虎を生捕ろう法被の男ゝ　　万仁
孫う候メまでめてお名乗り　　芭乐
子供山二人り云うび名望　　玉雪
ふるのおん神り云うを吾む雁ゝ　　芭乐

名言ハ古往今來比ヒ
キ紀ス人資ス大ヲ吸ラ
為ニ壑ヲ昇ル筌ヲ浅ヲ
ナリ虎ハ毅少ク
仏師為ニ造云ヨリ
思ハ私ニ物ヲ
風ヲ像ル小年ヲ
既ニ関ヲ

張考
柿本
里松
斗九
集ラ
柿本
左幸
玉泰
積山

柿四十三ノ二

名月ヲ
投出ス勅使
三國一ノ化
女而テ大
日本ヘ
虎ヲ生捕ル
称ス候メ
ヲ傷山二人
古今ノ如
ヲ

十夜小出
ヲ
ヲ
ヲ
ヲ
ヲ

為春
孤生
保川
中ヘ
海ヲ
万仁
芸乐
玉泰
芸乐

重複

名月はさらぬ十夜小出浦
秋出ても猶月清き勿来関
三国一の化粧の雛乃湊
女平へ登くい親の別れ哉
日光を生捕る清瀧の岡崎
虎和尚ふうふう饅メキ哉
孫子傷山二人り云ふ人名哉
公孫の御祖を香む旅さき

柳甲三ノ二

弥生
松雀
里杜
斗九
集雪
松雀
五幸
玉雪
精山

名ころいい蜜地銭い古社あり　孫句
寺紀之介小資丈大り吸らまる　松崖
為墳至まる学浅をきり切り　里松
さてふいうすこ虎ふい教山跡　斗九
仏師為へ迷云よまる祐為亮　集句
君い私后い物ときだー　松崖
為風を除こ神話の跡り日ふ　在幸
叫ろり小年ふ玉を申す武義坊　玉季
脱こ関ふてびめをこうふふこ　横山

杵甲三ノ二

二夕殺いろうそそそそそ大根式志　孫川
汁と掬たて中あるく汁椀木　山垂
此猫て俗のときあり汲きる　雲華
似せるのと知ってかたんの老局　為後
大さと紀一山猫よ緑ほたる　玉章
追ふ別辺のある初乃離　為後
風風の玉子都女御兄貸為　万仁
いろ甲四ふ月称空称ふる　孫川
清尓ハ干掬手和為い雷の新　谷句

春毎へ窮のまて関を明ヶ
三所の関さ面々むよりご
次仮を営也未世へ名をおし
婦つり格筆ほりきりとこが切
すりぎてさへまん家をおの排ひ
帆柱て春てけつると祖元云
笑しん娘いおよ来世へ一句
筆うまこてん吟さうと仙仲号
様ろごかる中針祝ひ毋うごひ

玉章
里松
孫号
花乗
九影
高与
里松
孫川
銭九

柳四十二ノ三

等を手引ろうたまんとき次
面ふさ筆跡を集めを年立
桃の中ふくこふをすぐくるま
辞るんーたのとき祖ろ梢を出し
ちりくめりそつるり後永文のや
何そこふ笑名あそもの筆
元のきりめ売或方訳来おてろ
花よめの中まけ姑妓きも
さろんぱ売いなくせたりろ

谷子
古柳
笑表
古柳
香央
孫川
今
古渡
玉章

残金のほど御まちがいと十二日
より一昨日の後ほどもよりお待ち申し
大まか空事加減めてう九ツ半ころ
あらまし封じ遠ひで二人り切
小使小花を呼ぶる御指図
いつ名付墨ぶそろえん筆遠ひ
非常二六ツげまバ二八乗
むづん風田植のみぶ指との
まづまず案やうの義御座候

折四十三ヒ

玉章
西村
花夕
マイタ
友尾
仝
笑素
梅里
孫川

そこらの船さと親文目ら遠
描き桑もうて居る二法屋
後ろうう女房をぐく月出
トタホーそんなく女房ども
大ウぶくを医者よ呼ぶ婦
此時鳴いトン幕ぇた遠へ
神楽ありふりくる春ふ事御届
まの事ぇちよりと参てる事の金
巨燈ぶんく舞ぶいまつ中

八橋
梅九
孫川
蔦売
桜住
孫川
里梅
当人
此妻

市尺更げ給ふ
大尾
百度の利金にて添る時代集　牛賀
三松評　　孟芳

俗さ家の燈くいろ紀伊制意　竹子
君ち山泊い當至物でるる色　万仁
御二代海い山ろく伊勢国　梅糸
祇ぢまで降穂ま小舟及伊掛　赤糸
又色苔よりも紅葉を買ぐり　竹柳
此ろ心手養ふ朝日が照るあり　吉程

折四十三ウ六

誰が目ふも〳〵七郎の中ど屋　吉森
醤油華小納波小伊勢小河声　長糸
猫がおて鰹狙踏く桃の節所　万仁
大さう紀一山猫ら神つちろよ　重吏
山陰居ろかけ小鼠小二十匁り　松雀
狗達いかる〳〵達月ことこと　万九
苦勉所勉良ろくい死ん　翠我
卯版でたきら第六ある竜　笠り
陳裏一ぬて二ケ月の夜ふ下

うらをいさや男武百の扶を雪
塩幌より九衣て落くひの雷　若宗
河端も藤浪ふり　玉程
君故の剣小秋くるの今納子　州麦
井の者い品川へいんきょ　西夕
地利を望つて学至愛於柳名　於崔
右信の石い川そ浦のそさ　雷史
一川い解と拙女小名を納し　多吏
於月を祈りまかまるていやそ俗　集雪

南小吹一の合い夏石第
庵路て沸さ傘猶田て平し　山石
和うかたたをうるもきの忠　万仁
至苅小拳雪ある武義坊　斗九
大げん台池の経翁ふちし　玉幸
改変のをいあけし返ときま　仝
貴やをお秋て機で義をとう　九静
名のうイ原を尾ておつふせる　笑山
投ふ宣七ル川三陽と国家寄　松寄

さすが秋三ツの指のそうじを
沈丁の流るる雷なぞみてやり　一秀
扶持をうしろへはする洗髪　葉溪
富士山の日月のある女帝　和里
東雲は中へ襷で志のびより　松里
ともある若胞衣は秋の気の　松柱
扶行のうは柱へ大工こうさ　昌乐
吹く気分のおのれ帝の程　赤乐
さよ寒しきさのめん傘いかし　保川

柳四十三ノ八

底深き海人さろうのこころはみ　千里
気と同気とうく誰恋ふ魅　里美
気のふの外は神のめの自　勉雲
三國一の化粧の緋乃袴　保川
那智り女房行金扇であけ　笑山
家敷ぼさをしーうみける後宛　紹文
指ほたうう七ツ目ううみ　雪平
夜の秋ふ新い気ふの移こ　松花
ぶ川いふ人のまこぶむふふ　笑雲

水性とも性元皮いて史掃　谷水
弓削の女続系図と市の者　孫女
彩茶室会と絹童へ指定し　孫川
大岡祀一句特で書いて中り　橋住
銭人有ると山吹さんでするなり　吉秀
句つの句作やて吹のる　雪矢
茶楽を思う笑を物をひ切　雪私
妻の十分用てて外トへそて　孤雪
乃成も風作でまるか人ど話　有堂

柳四十三九

志州のくの供を國までよび集
事別て楽を絶代をお出ー　集雪
照魔鏡をもて御斗の國都を　共笑
宗よりせて御斗の國都を　三久ト
動かぬ一網うの　一秀
船城ハ一網うの　嘉霜
冊の片鉦薙生へ　醉外
どくふある声へで茶喰　二蝶
ふりやうきりとニう切　亮石
　　亮乐

夏稼い椎の実高いてふの葉
村ぐんしや二百も屠るそぞろ
寒いしやの体格子よい思ひ付
松風もそよ海近いし酒のかり
志ぐひさ松茸もぐ汁の実夜
治部の狩下話てある画画
猪垣なるも計画かゝる巻向
大佛の鼻わざわざ巻向
ひんやり女金昆布拾へ歯を汚
柿里三十五

第五位
斗丸
品能
急養
集弓
万仁
銭九
幸延
九秋

大角豆ぞくけてそのそよめもぐ
昼のけどおのていきおくれのあさ
ふだ夜の宇陀松をそや女いまだ
大尾 紀が下也で帆柱小舟が浦家

未学評

虎の尾いぬより外は幽め市代
大人ぜーさぶげくまげる世を通し
白浪よあけのこゝろ秋田山
天台の雪仙客女水公家もな

幸定
孫川
義後
友幸

マイタ
孫川
玉幸
模好

第弐之巻　三浦へ行くの事

死を急ぐ客が乗合舟の事

傘で舟のかくまわれ京の町

八朔の雪諏訪うらの磐石

八百よりの生所金

切る指と折る指との事

むやくの雲も晴民をあしらう

三ぢやくそくも名医のかさ

仕出し建へ逃ゝ布袋の退出

卅里二ノ十二

千ぐ
いつ柳
万仁
亦楽
西夕
シク
翌我
扇橋
狐雪

杜若水へ柳子を
よこすで
指でよこすの計
死んでゐる
鯉を
鮒ぐり女房汗
油車いそぐ
武勇はるぐ
先きのいつぐ
姉のまかあまる

孫川
玉壺
銭九
海雪
笠山
雪史
笠山
慶後
駱元

孫川
印布

孫川
印布

孫川
印布

人の口中ヶ戸い走らふ而松おこげ　西夕
干ものの牙へいぐちれ勅使　眉長
いでや此世を生まれてハ無も出キ　孫川
我ものも我の俤ハ松をそ　仝
誠ハ成人してもおさな歌　里和
西年り元会の中ヶ年頭云　三ケ
未世とかりの狂ひの狂ふらん　出来
時平い文系附ハ武を後ヶ　三ケ
白き糸ふく深くのハ垂毎也　笙山

休四十三ノ十四

俤西を石ヶ編云ハ本この汗　孫川
退きふく我位のはよひ狂り　仝
くんずくてあ人ニまめニ本附ヶ　仝
十足のセふく人ニまめニ本附ヶ　西夕
富士川等人のあをぢかいふ和ッ　等哀
乗んてい人ヶ文ふ柳下恵　孫川
さてもの不ふうけびる書の赤　斗丸
近ふく別世のある新の元香　義後
来新ふよふくとふさふや姫　志夕

あつま撰びの歌ども
ゆりて張ひさし
お壽の壽書ハ二よりミつゆり
おてふ萩書書でふ
西京を法號弟ハ
今ハ心も乱ミ
猫ミ変ゝて
報仕ふ君ミ日ど
考り至ふ

孫川
箋表
西夕
紙文
や雀
辞外
狗九
機位
千鶏

枡四十三ノ十五

出立ゝへ純キ風俗へ
ぐんぜなん雪舞の
地利を習って
瞬門いあのそうる
きゝへ談笑ゝて
歌ふの袖うゝ
陳原の若衣
小流の福講さ
今紙乃ふま

孫川
西夕
や雀
沙弥
三松
笠ふ
仝
や雀

人等の指もあり大三十日　　手私
日吉小八宮の御社参泉涌寺　　仝
三千社参でもあり松坐一笑ん　　勝手
等前よ筆を取る武芸坊　　玉壽
きさくの小てん主る陣三位　　吉春
大そん男や挨拶仝るうらき　　左善
志この間つきあひくらめい梅だより　　龍石
等礼の時八連てやめ重ん箱　　松雀
武芸坊の志の時ふさる斗り　　手私

ほまれさん離そうそう等笑を治
等の波里よりちんだらさ
大一座志ふてつ面んくうぜつ姫ざ
弥ふ雷ん八仲町の酒好
日の朝ぶけふ翌の役を篇之
さ志ん切をもつるの立則
松雀ハ面八十翁
秋の等正百人首ぐ寿さうり
面ふくとう三の等玉飛である

玉壽
篠川
中布
樓好
松雀
西夕
三个
醉斗
芋洗

庚寅で濁さず拿捕田で平し
初でさげずこう勿
あそばされ〳〵そ何の
手劇の乃往院を
仕いあそばされ〳〵拙案の目ぶまり
大屋敷
神輿かまで御
文日堂講
河豆町
白き糸よう深う
孟母なり

万仁
保川
ミクト
在書
保川
牛蛟
孤雲
笑山
柿四三ノ七

巾六
ミクト
和泉
呉服
名柱
当人
木蛟
万仁
亜堂

鹿猿りさぬ沖の國家老
老う〳〵一千日ひて猿が出る
わ〳〵る国でも大の歯い等代
花の八月の名和
気味のよき日の九郎
多人ぜい若花の烟へ
乞云おろ〳〵深氏
大名をヤタ方ホ

嫁の琴う春今さらにそのうそ　白雪
傍正の引ぞりたるおそろしき　当人
仇吉に勅使饗て弱を留　五雪
竹のみう雪ふる窓ゟと廿三　玉川
うそうそ禅人を笑ふ嚊姫　木賀
袖木の兄い弟名歌あり　三松
元のもさふ翁を引分給り　吟竜
秋る出さ勅由へ妻でと先　孤雪
一家中（ヲイヌがハラ）狛ほ系（ハラ）まを啖ふ　柳白

（ママ）

金壺りう涙ゟ　谷水
お高のまいあぢ　丸彩
きりぐ〳〵吟よ　谷彩
傘で新のか　万仁
さびきこん三十一　雪鳥
りてそ筆十六俵へ　仝
嫁の婦るまん　集雪
患后の矢立　緑雪
三度目ふ中へ　河好

沼連綿で大鰐その首ッ引キ
今度ハ形阿弥去ヶセうと師匠
墨そ着ル晩ふ時るる事ハの町
仮場とうふ字が恵くるる月と
日女へそ宅へさんと迎
ヤレむそ母うるんと名ぶが一そ
死人である時を捲糸つきお亀
ふあが買ッても勢ふで入しめふっ
鐘のそを祈ろふ嵐のおそ氏

折四十二丸

松柳
ミクト
湯当
兎石
里松
三松
湯当
仝
艘重

先艘
一秀
高雲
谷あ
保来
マイタ
松雪
艘重
雪中

寺ヶ鍵でそんぶ家をあのでるん
屋ハはるの地うまとるい違
業とり始皇まそぶんでもる
きてあれそ大役でそんと
そんあるいく膳へのセ糸をお記
あろうる事ふ違そ或ふ切
神代もきうびでらも仕ふ家人之
門トロを足まて邪ふ送り縁
叶描そ体の時あそ報きもう

元トモ屋」ていきまへ
ちひ白久人ト二テ日記屋でより
湯河町五郎ア用ハなし
来帯の井へ稽で志のびはて
桐生を一下月とはをみさやうさ
さやるのかむへ山師わが仕事迄
りまをいあぶなこぶこそ判
業うう〳〵業おりて〳〵上ハ業慶
出来の三ハ二上り三下り

玉章
笠山
申て
ま私
西夕
琴我
雪ま
狂文
西夕
柳四十三廿

十丈の脊井へごまの弐足つけ
屋うう仕で湯師もうう此る
ちひ麦居け湯屋か母ハあり
精ろの中うたむいてう鶏
はうてぐうのもあ綾
四松笠へ岩光屋ふ麦でよケ
化生の縁をうり合人神の物
隅田川芸ろまうのさうう
称うあまをあと綾でおちび

仝
中布
在安
西杉
万仁
和里
香矢
春朱
芸朱

尾の先を引ずりて池之位
掌を立ておりる時多
田今弐の傳左衛門
おんこんまで引ずりて
百合ゆり花を入りこと
此人今ゆ掛守ゆ申
石の穴ゆおせ木ッぱ
発車前行ゆ數也居
ちてのき〳〵女帝で
裏をうつ

柳ゆ十三ノ註

むやみの関き故氏を申
ニチすも引ずりきだる川の如
明ケ六ツの発居繰て
大一発おとて門ぐ
ぎこゑの発射をう
き移ゆを海老ゆ
月又兵衛海老ゆ
黄ゆ昨ゆ夜虫でゆ
宮ゆりそのまゆ
一ノ

教為
谷子
和泰
有栄
山春
仝
笠袁
中布
一秀

翠袁
松雨
谷ゆ
中布
玉春
松雨
ゆ雀
ゆ夕
一秀

集雪
八橋
州麦
子規
残九
柳巴
志丸
誠好

神蔵山 鯉や河豚
女房もたよりなく
ずいとくどさ夜と
まがみえて
末のぞりで雪をふむ
小役小者を供もする
天幕を組へ張てある
牛の刀ナを神ぢ川
三重圓のおぐと雪

碑石
義俊
和恭
里洲
百夕
衣尾
眉長
三松
雪史

兎糸	兎糸
蔵元	蔵元
名称	名称
眉毛	眉毛
本乐	本乐
名狂	名狂
模好	模好
赤学	赤学
万仁	万仁

物売	物売
マイク	マイク
明度	明度
赤学	赤学
本契	本契
全	全
松子	松子
物産	物産
学院	学院

お稲下女毛今住吉の子地名
松右衛門でお春てお稲よりも
浜辺のうた女房の出る
伊勢の国名所図会に
昌平橋通り神田八ツ小路
堂島の蜂屋の外 小島
弥一郎てとお中てる粗女町
村雲老武百も出てとなり
西引き名高し屋市一度ゑ

柳田十三ノ巻

名所和歌
百人一首
武蔵野
和泉
中納言
万九
牛蒡
斗九
百人一首

ほんの上まで今一ツ女が出や
年若いまでもう小町かくむこん
あそびもれてでもけつまるまで
大勢でのけるやうに橋田氏
牛の屋まいものやうに橋田氏
氏ゑて在徒の一の村
正宗と同ほでや女四さ
私が下帰ぐ帆柱の綱がつき

船ナカの会の開帳をしてや共八濟キ
うう弁ウの勢人遠めく千の手信うり
大尾雅蒜〻杜蒜をうる小宮動屋
川柳評
武八弐を止ル字義のまゝ入國
洛陽仮寝上腹ト羽を休め
言ひ訳ありく伴天連ころび
洛ウ多い方ろく伴天連ころび
山肩衣枝も
柳四十二北

雲雀もかの子の国一私会の波
大名ゝ熊手をかつく能蒜壹
下馬札と言ふ砂の松角ハ合
孔明が指ス弁八百筆騎
黒髪とかり分ケ髪八高のひ手
八百話すきめのうるえんぜき
芦の穂を高てもんの向てくき
ひよ鳥湖射御の地を能し
海ゝアも塩ゝ引てくる小目お度サ

孫川 蕉渡
ミクト や雀
高雪 和花
朱笑 雨夕
高雪 伴川
マイタ や雀
孤雪
や雀

い天幸十六俵へ紀が曾り　　麦鳥
四家の新く妹さ扶さ助　　孫川
むり思本ハ扇の堂の下一桂　　濱好
禅修のくしく過る遊千門　　孫川
金柱り小積うまさ強にて　　秋多
妓の琴声今ありこと　　白雪
終く桜のおくうさ母あんど　　未学
小うく九一度朝日ぐの曾り　　吉狸
接拶をうくわる法髪　　里柱
柳尼十三北六

以ろが三足うみ出して十三里　　横好
猪ま分係てのく伸望する　　仝
神酒の石の初稲穂元ま之　　仝
紀ま春うぐ曾のあるど　　い柳
妙のり望ば法まる去る歌　　未学
いそうさ朝小三月柏を思せ　　牛丸
白き象触ぐめうのハ墨形之　　智義
手又棒で女房十新房へり年　　紀朱
制札ぐまそ九智義坊

右の石川さゆり海のそこ
時平ハ文章時ハ武をぶんし
万葉を乳母に抱て乗むこ
隅田川長兵衛のさそふ水
月見を明りでふく仲の町
三度目ゝ別際よりつゝ流ゝ房
正宗玉かぎき数医ゝ日望ゝ
かぎやゝゝ牡丹と四ゝが飛左
鳴依傍不都ゝ甲斐ゝき記の
柳ゝ十三七

香ゝ
三ゝト
紅葉
赤糸
三松
白ゝ
玉章
築ゝ
孫川
玉章

ゝいゝ山葉ゝ
るゝ焼ゝゝいそん乃添ゝ
ゝ助山二人ゝり千かゝび名主ゝ
出ゝ七ゝゝゝゝ小指流骨ゝ彩
朝ゝ此ゝ方ゝよるゝ約ゝる
第ゝゝ望ゝゝゝゝゝゝ
何ゝゝゝゝ本カツチカチ
大名ゝ方ゝゝ静ゝ
血眼ゝ添ゝゝゝ追ゝける

今
や雀
玉章
笠山
玉章
志ゝ
孫川
玉章

二牒

新よきよめそそぐ松の枝　葉雪
冬の朝よき年玉を手に　玉章
源左衛門殿へ参る　山春
大磯を一山猫よ秋の雨　玉章
出入の妙笛ぐっと　英佐
きこえる旅人の　八楷
極あいそのいゝ家をおたづね　ミクト
打ぎでもんぼ百八十文　丸秀
玄徳は玄葉たる人である　仝
　柳呼三共

鰻のこを祝ふ嵐のおとさ　玉章
旅の宿る女房達をもひ立て　敏重
茶釜で玄米を炊く　若秀
動女も庄司甚右衛門　義淀
おつくんの指八人参ようたらし　若秀
志ゐ縄で大磐石のまつり　仝
小辰の光りで松明の　於栄
初光山熊野詣の住吉　静子

きこり天目山でそうろうせ
聲七手で後のやくもし〳〵
目の屍かねをいとせる中〳〵
二夕役いとけて働く大根武士
ちゝこめりそめり漆家之の諸
船乞ふ肌をあけそうろう
柳さ多う勝眉をそめる仲
伝吉の武勇ふ鬼おりそめ
肌の火を息子湯あ清ミ〳〵

柳平三楽

玉壺
松雀
織好
孫川
雷父
傳来
孫川
孟春
二蝶

きく衆居のふこを食小母をする
あさまう〳〵事て門見い耳与り
生マ浦ち力門初のをけるもう我ア
う〳〵ふりあ法うのいお家老
鬼玉いまさうぞ〳〵も仏まん
祇つきがきれて仕彩るう〳〵檜
深ク斗ゃでござ二
三味セん乞婦のうぐ〳〵立ける
初うまる事あし〳〵遠ので二人り切」

孟春
志秀
音乐
孫川
撲好
積山
和里
マイタ
仝

卜筮の亜を作くる米汁
鍾汁ぶくよりいくら倍福哈イ
さんいくそ人の居ん妻の伴
物を喰ふようにさこ吸玉箕侯惇
大唐医義医ハ此ふ及をうち
羊がふん酢立ててい二十年
牛連て音次免疫をまねる
飛こでおる所を梳糸ほき玉
や紀ぞくて賀女お吸うふる

孫川
赤乐
孫川
玉玉
千之
赫亮
七者
海雪
七者
柳原十二册

我新人法を走ろ行る
飯塚の源小おのよぐれより
庶賀が源人ざう源
十三首頭市のさが人
鬼毛帥のさん毛
おきて玉移り亜海
居ん能病がくと
仲条い後つふんが
鍾汁ヨ雪を振て

銀文
兵能
千之
み要
銀金
巾布
急表
吸毫
孫川

小役人を以て申し難候間
押而御入用度ぶのふさへる
きん玉をうんざんさせ
牛の右脚有ひ
三度をくぐり教医ハ守退キ
音小肥ニ成肉あり兵粮ヲ
手を合せ
お遊ふ玉ざうニうれのこり

発句
孫川
芳風
岩雀
三松
古波
楼好
古程
孫川
御早十三世二

糟山
菊支
仝
豆人
水賀
紀夕
孫川
仝
眉長

小役人を以て申し難候間
押而御入用度ぶのふさへる
きん玉をうんざんさせ
牛の右脚有ひ
三度をくぐり教医ハ守退キ
音小肥ニ成肉あり兵粮ヲ
手を合せ
お遊ふ玉ざうニうれのこり

発句　孫川
芳風　岩雀
三松　古波
楼好　古程
孫川
御早十三世二

糟山　菊支
仝　豆人
水賀　紀夕
孫川　仝
眉長

そげふ板をすげて辻番出て通
る比須藤面影うつくしき女房子
ホウ
彭越をよそほひ薄のすゝきを尾
二ツ持ちまとひつゝ
毛ぶるひの〳〵板をまげて指庵銭拾
三味をかゝへてそろ〳〵御客の供
義士方の仲間をつゝのまんぢう
見る人のそゞめきをかりるかん
巻舌やまるの屏風をこえでる

柳四十三世

雷矢
や雀
仝
二葉
西夕
陸つ
猿山
孫川
里秋

ゆきもとりやふ里恵下女が毛剃
嚊もう〳〵嚊めもはや〳〵居ル
日もとくのうつくしき湯でゞ下女帰り
年礼ふかく出のまをまつる御用や
何ごろ〳〵ふ一分ありげに局入
酢をはぶ〳〵振るふ下女よる
あかるもよそ〳〵しそりで通
居風呂へ下女が乗迎あの音
大尾
檀右ゑもんの所へ道筋仕そこね

酔月
孫川
里秋
虎声
孫川
楼好
孫川
和里
志都

軸

林ふもとの茂りや水上　文日堂

逝の声も恵こを　砕川

うけつ場り茶　川柳

恵田花笑笹四十三編

○俳諧風書品目録　江都上野山王之傍　花屋萬次郎

俳風柳樽拾遺十冊　川柳点句評四季題解并古今誹諧柳樽作者評

同川傍柳　古川柳点　三編

同新句狂歌合邉錦篇　二編開板　江戸五色墨初点　柳樽著者

同拳墨　北斎庵主画　狂歌連中摺

俳諧手引草　同百人一首　狂歌連中摺